

# 明治の地獄

三遊亭円朝

青空文庫



え、一席申上げます、明治の地獄も新作と申す程の事でもなく、円朝が先達て箱根に逗留中、宗蓮寺で地獄極楽の絵を見まして、それから案じ附きましたお短かい落語でございませう、まだ口慣れませんからお聞苦しいございませう。人間が死んで地獄へ行くとか、善を為したる者は極楽へ昇天するとか、宗教の方では天国へ行く、悪国へ墮ると云ふ、何方が本当だか円朝には分りませんが、地獄からどうせ郵便の届いた試しもなし、極楽の写真を見た事もないから、是は有るか無いか頓と分らん事で、人が死んで行く時は何んなものか、此の肉体と靈魂と離れる時は其の靈魂は何処へ去きま

すか、どうも是これは分わからん。此等これらの事を考へなければ本當ちしきの智識ちしきとは言へんと云ふ事いださうでございます。随分ずるぶん彼の悟道さとりのの方ほうには、

「ガンコウ地に墮おちんと欲ほつする時ときもさんか何れいづの処ところに達たつせん。と

死んでプウと息の止まつた時に此このころ心こころは何処どこへ行くかと云ふ：

：何処どこへ参まゐりませう、是これは皆様方みなさまがたを伺うかがつたら何処どこと仰おつしやるか

知りませんが、円朝ゑんてうには分わかりません。大病たいびやうでも自分で死ぬ

と覚悟かくごをし、医者いしやも見放みはなした事も知をつて居をり、御看病ごかんびやうは十分に

届とどき、自分じぶんも最もう死ぬと諦あきらめが附ついてしまつても、とろくと病び

氣やうきづ勞かれで寝附ねついた時に、ひよいと間あひだに眼めが覚さめる事あが有あります。

男おとこ「いやア……大層たいそう広い……こりやア原はらのやうな処ところだ……おや

僕はぼく丈夫ぢやうぶだが、此間このあひだ佐藤進先生さとうすすむせんせいが逆とてもむづかしいと云い

つたよ、それから妻さいが心配しんぱいして、橋本先生はしもとせんせいに診みて貰もらつたら何どうだらうと云いふから、診みて貰もらつたが、橋本先生はしもとせんせいに診みて戴いたいてもむづかしいと云いはれた、さういふ御名医方ごめいゝがたが見放みはなすくらゐの病びやうきだから、僕ぼくも覚悟かくごをして居ゐたけれども、少し横よこになつてうと氣きだから、眠ねられると思おもつたら、眼めが覚さめたやうだが……此こんなぼんやりした処ところへ来きた……遠とほくに電氣燈でんきとうでも点ついて居ゐるのか知ら、プウと明あるいよ……こりや歩あける……今いままでは両方りやうほうの手てを持もつ腰こしを抱だいて貰もらはんと便所ようばへも行いけなかつたが……これは妙めうだ、歩あける……運動うんどうに出でて来きたのか何なんだか分わからん……おや向むかうへ女をんなが一人ひとり行いく、もしく姉ねえさんく。女をんな「はい。男おとこ「少々せうく物ものが承うけたまはりたうございませうが、此こゝ処ところは何ど処どこですね。女をんな「此こゝ処ところは六道だうの辻つじでござ

ございますよ。男「え……それぢやア僕は死んだんだ、こりやア驚いた、六道の辻だとえ、昔青山にさう云ふ処が有つたが、困つたね、僕は死んだのか知らん……姉さん何でげすかえ、矢張あなたは急病かなんかで此処へお出でなすツたかえ。女「はいわたくし私も疾うから参つて居ります、おやまア、岩田屋の旦那だよ、貴方は腎虚なんでせう。男「馬鹿をいへ、さうしてお前は誰だツけ。女「柳橋のお重でございますよ。岩「なる程芸妓のお重さんだ、お前は虎列刺で死んだのだ、これはどうも……此方へ来てから虎列刺の方は薩張よいかね、併し並んで歩くのは厭だ、僕は地獄へ行くのは困るね、極楽へ行きたいが、何方へ行つたら宜からう。重「何方へ行つても最う造作ア有りません、直きで

すよ。岩「それでも極樂ごくらくは十萬億土まんおくどだと云いふぢやアないか。重  
「其処そこに停車場ステーションが有ありますから、汽車きしゃに乗れば、すうツと直ぢき  
に行いかれますよ。岩「もう地獄ぢごくへも汽車きしゃが出来たかえ、驚おどろいたね。  
甲「へえ、どうも旦那だんな、誠まことに暫しばらく……。岩「いやア、アハ、こ  
れは吉原よしはらの幫間たいこまちの民仲みんちゆうだね。民「へえ、どうも思おもひ掛かけな  
い処ところで旦那だんなにお目めにかゝつたぢやアないか。乙「へえ旦那だんな、誠まことに  
暫しばらく、どうも宜よくお出いでなすツた。岩「なに宜よくも来こない……。こゝ  
に川がが有あるね。民「これが有名いうめいな三途川づのかはと云いふので。岩「三  
途川づのかはにしちやア橋はしが有あるね。民「旧もとは渡わたで対岸むかうに大きな柳きの樹き  
が有あつて、其処そこに脱衣婆ばあさんが居ゐて、亡者まうじやの衣服きものをふん奪ばいて、六道だ  
うせん錢せんを取とつて居ゐましたが、渡わたしはいけないといふ議論ぎろんがありまし

た、それは水害すゐがいのためにもし船ふねが転覆ひつくりかへると蘇よみがへ生なる亡やつ者  
が多いので、それでは折角せつかく開ひらけようといふ地獄ぢごくの衰微すゐびだといふ  
ので、此この通とほり鉄橋てつけうになつちまいしました、それ御覽ごらんじろ、三途づ  
橋ばしと書いて有ありませう。岩なるほど「成程さんづのかは、三途川てつけうは鉄橋かが架かるな  
ど、云いふのはえらいもので。民ひら「えらいなんて、地獄ぢごくの開ひらけた事  
を貴方あなたにお目くらみにかけたい位のくらものです、兎とも角かく彼あ処すこに茶屋ちやが有あり  
ますから入いらツしやい。と是これから案内あんないに連つれて行ゆき、橋はしを渡わたる  
と葭よし簣ず張はりの腰掛こしか茶屋ちやで、奥おくが住居すまゐになつて居をり、戸棚とだなが三つ  
ばかり有あり、棚たなが幾いくつも有ありまして、葡萄酒ぶだうしゆ、ラムネ、麦酒ビールな  
どの壇びんが幾いく本ほんも並みんで居ゐる、中なか々く届とどいたもので、土間どまを広ひろく  
取とつて、卓テーブル子すに白あいテあブル掛かが懸かつて、椅子いすが有ありまして、



烟草盆たばこぼんが出て居り、花瓶くわびんに花を挿し中々なか気取つたもので、菓子台くわしだいにはゆで玉子たまごに何か菓子なにが有ります、好い菓子よでは有りあませんけれども、萬事ばんじ届いて居ります。岩い「こりやア驚いた、婆ばあさん茶を一杯ばいおくれ。婆か「お掛かけなさいまし、宜く入いらツしやいました、さ此方こちへ、汽車きしやの出るにはちつと間あひが有りますよ、今極いまご樂らくが出ました後あとでございます、これから地獄行ぢごくゆきが出ます。岩い「妙めうだね、へえ、感心かんしんだね。ちやんと麦酒ビールの看板かんばんだね、西せい洋酒うしゆのビラさが下つて居る所あが不思議ふしぎだね、此この婆ばあさんは何なんですか。民たみ「これは脱衣だつえい婆ばあさんなんで。岩い「ア、ア、三途川さんづのかはの婆ばあさんかえ。婆ばあ「はい旧もとは彼等あすこで六道だうせん銭を取つて、どうやら斯かうやら暮くらして居をりましたが、今度こんど此処こゝへ停車場ステーションが出来できるに就ついて、茶ち

屋を出したら宜からうといふ人の勧めに任せて、茶屋を始めまし  
 たが、此方が結句気楽です。岩「怖らしくない婆さんだね、新  
 宿の婆さんとは大違ひだ。婆「何処も彼も貴方実に立派に成  
 りましたよ。岩「向うの微かに遠い処に赤い煉瓦がある、あれ  
 は何だえ。婆「陸軍省でございませう。岩「へえ、陸軍省が  
 出来ましたかね。婆「明治十年に西郷隆盛様や桐野様や篠  
 原様が入らツしやいまして、陸軍省をお建てになりました、  
 それから身丈格好の揃つた亡者を選んで、毎日々々調練でござ  
 います。岩「へえ、調練……これは面白いな、向うの高  
 い山の上に白いものが見える、あれは何だえ。婆「あれでござい  
 ますか、文部省が建ちましたの、空気の好い処でなければなら

んと仰おつしやいまして、森大臣もりだいじんさまが入いらツしやいまして。岩  
 「へえ、驚おどろいたね、大層たいそう揃そろつて出来できましたね、地獄ぢごくのお閻魔えんま  
 さまは何どうして居ゐますね。婆たゞい「只いま今いまはお気楽きらくでございますよ、  
 皆みなさん方がたに任まかせツきりで、憲法けんぽふ発布はつぷが有ありまして、それから  
 皆みなえらい方かたが引受ひきうけて何なんでもなさるのです。岩い「へえ、何どう  
 云いふ姿すがたで、矢やツ張ばり舌したや何なにか出でして居ゐますか。婆おも「重おもたい冠かんむりは脱と  
 つてしまひ、軽かろい帽子ぼうしを冠かぶつて、又また儀式ぎしきの時ときにはお冠かむりなさいま  
 す、それそれに到頭たうとう散髪さんぱつになツちまひました。岩岩「然さうですかえ、  
 十王わうさま様さまは。婆わうさま「十王わうさま様さまは宮様みやさま同どう様やうなお家柄いへがらでございま  
 すから、何なにも御用ごようはないのでございませう。岩岩「錢ぜに札ふだを付つける  
 奴やつなどは何どうして。婆あれ「彼あれは書記官しよきくわんに成なつて居をります。岩岩「え

らいもんですね、鬼おになんぞは矢張角やつぱりつのが有りませう。婆「いゝえ、  
おに鬼の角つのは皆みんなな佐藤さとうの老らう先生せんせいが入いらしつて切きつてお仕舞しまひなさい  
 ました。岩「へえゝ。婆「ちよいと小ちいさいシヤツポを冠かぶり、洋服  
 で歩いて居ゐますから知しれませんよ。岩「あの浄玻璃じやうはりの鏡きやうに業ごふ  
はかり権衡どは何どうしました。婆「業ごふの権衡はかりは公園こうえんにお茶屋ちやうが有ありまして、  
そこ其処すゑつに据付あけて有ありますが、皆みなさんが僕ぼくは地獄ぢごくへ来きてから体め量りょうが  
ふ増ふえたなどゝ云いつて悦よろこんで居をります、浄玻璃じやうはりの鏡きやうは、ストウブ  
たを焚たきます上うへに飾かざつてあります、縁ふちだけ取換とりかへて、娑婆しやばの事ことが写うつ  
ぼくる、僕ぼくは是これだけ悪い事ことをしたなどゝ云いつて在いらつしやいます。岩  
なるほど「成程なるほど、血ちの池地獄いはぢごく、針はりの山やまなどはまだございませうか。婆「いゝ  
 え、ございませんよ、岩崎弥太郎いはさきやたらうさんと云いふ方かたが入いらつしやいゝ

まして、あの旦那様が針の山を払ひ下げて、其山を崩した土で  
 血の池を埋めてしまひ、今では真ツ平らで、彼処が公園に成りま  
 して、誠に面白うございますよ、女が燈心で竹の根を掘つた  
 りする観物が出ますよ。岩「成程、へえ。婆「パノラマを  
 往つて御覧なさいまし。岩「地獄へパノラマが……。婆「大層  
 立派に出来ましたよ。岩「矢張りあの浅草の公園に在るやうな  
 戦争の図かえ。婆「いゝえ、昔の地獄の火の車や無間地獄などで、  
 此方に本当の火の車が有りまして、半分絵で描いて有つて、  
 その境界がちつとも分りません、誠に感心だ、火の燃える処が  
 本当のやうだ、怖いなんツて皆さんが仰しやいます。岩「成  
 程、然うでございませうかね、それから正月と盆の十六日に

蓋ふたの開あくと云いふ、地獄ぢごくの大きな釜かまは何どうしました。婆ばあ「あれで瓦ぐ  
 斯わすを焚たきます、夜よるは方ほう々／＼へ瓦斯ぐわすが点つきますから、少しも地獄ぢごく  
 は怖こはい事はございませぬ。岩い「へえ、開ひらけたもんで。婆ばあ「開ひらけ  
 たツて、貴方あなた芝居しばゐ見みに入いらツしやいよ、一日いちにちお供ともを致いたませう。  
 岩い「地獄ぢごくは芝居しばゐが有ありますか。婆ばあ「有あるかツて、えらいのが来きて居ゐ  
 ます、故人こじん高島屋たかしまやや彦三郎ひんすゐが来きて居ゐます、半四郎はんしやうや、仲藏なかざうな  
 ども来きて、それに今度こんど訥とつしやう升そうに宗十郎そうじやうが這入はいつて大層たいそうな芝居しばゐ  
 が有あります。岩い「成程なるほど此方こつちの方が宜いい。婆ばあ「それから豊前太夫ぶぜんだいふ  
 が来きました。富本とみもと上じやうるりに庄五郎せうごらうが来きましたので、長唄ながうたの出で  
 囃ばやしが有あります。岩い「成程なるほどこれはえらい、ぢやア見いに行いきませ  
 う。と云いふ処ところへガラ／＼（轟とどろく音おと）婆ばあ「馬車ばしやが来きました。岩

「おゝ、お立派りつぱな馬車ばしやだ、大きな方かただね。婆おば「あの方かたは山岡やまをかてつ鉄太郎たらうさま様おつと仰おつしやるお方かたです。岩い「側そばに何かなに二人ふたり附ついて居ゐるね。婆おば「ハア、お一人ひとりは静岡しづをかの知事ちじをなすつた関口せきぐちさん、お一人ひとりは御料局ごれうきよくちやう局長ひだの肥田ひださんで、お情交なにかが好いいもんだから、何時いつでも御ご一緒いっしょで。岩い「大層たいそうお忙せわしさうで。婆おば「なに極楽ごくらくへ行いつて入いつしやいましたが、近このごろ来こ極楽ごくらくも疲弊ひへいを仕しましたから、勧くわんげ化げをお頼たのまれで、其事そのことで極楽ごくらくへ入いらしたのでございませう。岩い「極楽ごくらくの勧化くわんげかえ、相変あひかはらず此方こつちへ来きてもお忙いそがしい。婆おば「それに関口せきぐちさんと肥田ひださんは鉄道てつどうには懲こりたいと云いつて、何日いつでもお馬車ばしやで。岩い「何なにしろ奇態きたいなもので……。と云いつてゐる内うちに、慣なれないから足を踏外ふみはずして三途川づのかはへ逆トさかンボを打う

つてドブーリ飛込むと、岩「無無阿弥陀仏。々々々々《く》々々々々《く》。女「実に驚きました、彼んなお丈夫さまなお方がど何うして御死去りになつたかと云つて、宿の者も宜しう申しました、嚙お力落しで……。婆「有難う存じます、良人は平素牛肉などは三人前も喰べました位で……。女「おや、お待ちなさいまし、早桶の中でミチく音が致しますよ。妻「魔が魅したのでせう。岩「明けておくれく、蘇生へつたから明けてお呉れ。岩「何とか云ひますよ、お明けなさい。と云ふから、早桶の蓋を取ると蘇生つて居る。妻「あらまアお前さん助かつたのかえ。岩「三途川へ落こつて蘇生へつた。妻「妙だね、ま嬉しい。女「斯んなお芽出たい事はございませんね。岩「皆さんはお



通夜のお方か、おやく、物騒だな、通夜の坊さんが酒に酔倒  
 れて居る、炮砥に線香をどつさり差して、一本花に枕団  
 子旧弊だね、是から思ふと地獄の方が余程開けた。と云ふ  
 お話で。

(拋酒井昇造速記)



# 青空文庫情報

底本：「明治の文学 第3巻 三遊亭円朝」筑摩書房

2001（平成13）年8月25日初版第1刷発行

底本の親本：「定本 円朝全集 巻の13」世界文庫

1964（昭和39）年6月発行

入力：門田裕志

校正：noriko saito

2009年6月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# 明治の地獄

三遊亭円朝

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>